

1 長後地区の神社

1-1 白山神社（神奈川県神社庁では白山大神）（藤沢市下土棚 1 0 6 5）

祭神 いざなぎのみこと 伊弉諾命・すさのおのみこと 素戔鳴命

配祀神 はいししん 八坂大神 やさかのおおかみ

創立 不詳

境内社 稲荷社・天王社

例祭 9月18日（ただし、現在は9月18日に近い9月の休日を例祭日）
社屋等の形式

1. 鳥居の形式 石造・神明鳥居

2. 社殿の形式 拝殿は軒唐破風向拝付き入母屋造り。おおいでん 覆殿は神明造り。本殿は一間社流れ造り。並んで散米棚造りの「八坂大神」を配祀する。

3. 屋根・装飾 屋根は拝殿・覆殿ともに波板鉄板葺き。
装飾は拝殿の大棟に「左三巴」紋が三つ並ぶ。また覆殿には
そとそ 外削ぎの ちぎ 千木、5本の かつおぎ 堅魚木が乗る。

由緒

下土棚地区の鎮守であり、神奈川県神社庁では「白山大神」と書かれているが「白山神社」で知られている。

最初は当地の広田宅の、個人的な鬼門除けの守神の建築物として、建造されたものでしたが、江戸時代初期の寛文四年（1664）に広田主水および氏子中により、下土棚村全体の鎮守として再建され、記念として銀杏（むすびの銀杏）が植樹されたと伝えられています。また、寛文年間（1661～1672）には、下土棚字西光山から八坂大神も環座したと伝えられています。安永四年（1775）には社殿が造営され、明治六年（1873）に下土棚村の村社に列格しました。そして、昭和六年（1931）には本殿・拝殿が改築されています。

毎年例祭日には平成十二年（2000）に「藤沢市指定無形民俗文化財」に登録された下土棚白山神社獅子舞保存会による「下土棚祭囃子」が奉納されています。

境内の石碑石仏類

境内には庚申塔・地神塔ほか、破損・風化などにより刻印の判読できない石碑・石仏類が多数残されています。

・青面金剛庚申塔

文政十亥年（1827）二月吉日講中「三猿・日月の図」「右・長後道、左・藤沢道」「下土棚 小菅新兵衛ほか六名建立」の刻印

・文字庚申塔

安政三年（1856）十月造立 右側面に「南藤沢道」 左側面に「東戸塚道」の刻印。

・堅牢地神塔

維持嘉永六年（1853）癸丑二月吉日造立「相州高座郡下土棚村」 台座に「中村」の刻印

備考

※伊弉諾命・素戔鳴命

素戔鳴命は伊弉諾命の子。天照大神（女神）と月読命（男神）の弟神。伊弉諾命は素戔鳴命を海の神にしようとしたが、凶暴で「天岩戸」事件を引き起こし、結果、高天原から追放され、出雲国で八岐大蛇を退治し、天叢雲劍（^{あめのむらくものつるぎ}草薙劍）を得て天照大神に献じたという。

※堅牢地神塔

堅牢地神とは大地をつかさどる神。農業の神。

1－2 天満宮（通称：長後天満宮）（藤沢市長後 1 4 1 2）

祭神 菅原道真

配祀神 天照大神（元・伊勢山に鎮座した神明社の祭神を合祀）

おおやまぐいのみこと

大山咋命（元・山王原に鎮座した山王社の祭神を合祀）

創立 不詳

境内社 八坂神社・白蚕神社

例祭日 9月25日

社屋等の形式

1. 鳥居の形式 石造・明神鳥居（一の鳥居、二の鳥居とも）

2. 社殿の形式 拝殿は流れ向拝付き入母屋造り 本殿は軒唐破風付き流れ造り

3. 屋根・装飾 屋根は拝殿・覆殿ともに銅板平葺き。
装飾は両殿の大棟に神紋の「梅鉢」紋が二つ並ぶ

由緒

長後地区の鎮守であり、通称「長後天満宮」

平安時代の末期、渋谷重国の祖父・秩父六郎基家（平武綱の子・河崎基家とも称す。）が武蔵国秩父（埼玉県西部・秩父平氏発祥の地）からこの地に移り住み城館を構えると共に城中に守護神として勧請したのがこの長後天満宮の始めといわれています。

その後、鎌倉時代の建保元年（1213）に起きた「和田合戦」（鎌倉北条氏と和田義盛の戦）における渋谷氏の衰退や、その後の度重なる戦乱により社殿は^{はいたい}廃頽していましたが、江戸時代初期（三代将軍・家光の頃）この地（下長後村）を知行した地頭で旗本の朝岡久兵衛泰勝（朝岡家四代目）が金銀奉行を命じられ、下長後に石高537石を与えられたことから、子孫の朝岡久兵衛国豊（下長後に200石知行）により寛延三年（1750）社殿が再建され、天明七年（1787）には山王原に鎮座した山王権現（祭神：大山咋命）と伊勢山に鎮座した神明宮（祭神：天照大神）を合祀しました。

慶応四年（1868）には神楽殿が造営され、明治元年（1868）には上長後村と下長後村が合併し長後村となり、天満宮は村社となり長後村の総鎮守となりました。

大正八年（1919）拝殿が新築され、昭和五十三年（1978）社廟が修復され、昭和五十六年（1981）には本殿・拝殿とも藁葺き屋根から銅板葺き屋根への改修が行われ今日に至っています。

江戸時代初期から世襲的にこの地を知行した旗本・朝岡氏は、明治維新までこの地を知行し続けました。朝岡家累代の墓碑が同村所在の永明寺（臨済宗円覚寺派寺院）にあります。

藤沢市指定文化財

- ① 石灯籠 寛永十九年（1642） 旗本・朝岡丑之助 寄進
（竿石に「相州長後天神 寛永十九年十一月 日 朝岡丑之助」の銘あり。）
- ② 石造狛犬一對 貞享三年（1686） 中村氏 寄進
（この一對の狛犬の背には、「貞享三年三月二十五日・相州高座郡長後村」の銘と共に、一体〔阿形〕の狛犬の腹部下には、中村氏の娘「おち世」、もう一体〔吽形〕の狛犬の腹部下には、同じく中村氏の娘「支むら」の銘があります。）

その他、長後天満宮の境内には次のような数基の石碑・石仏類が点在しています。

- ・村社指定表示石 「昭和七年（1932）建立」

・菅公千年祭記念碑

・嗽水盥うがいみずたらい 「弘化三年（1846）建立」

・拝殿建築記念碑 「大正八年（1919）建立」 裏面に「喜捨金連盟帳」（連盟帳に掲載されている喜捨金額高額代表者として井上氏・持田第二工場など）

・句碑 「弘化三年（1846）建立」

・狛犬一對（拝殿前）「大正十四年（1925）」諸節照藏氏奉納

・小狛犬一對（本殿階段前下）下長後・井上マチ氏奉納

・県下名勝史跡四十五佳撰当選記念碑 「昭和十年（1935）建立」横浜貿易新報社（現：神奈川新聞社）建立

・梵鐘鑄造記念碑 「昭和二十九年（1954）」建立

（梵鐘が同年に鑄造され、鑄造資金を寄付した氏子らの氏名が刻まれる。）

備考

※ 朝岡丑之助

朝岡丑之助は朝岡奏勝の孫・朝岡国孝の幼名。国孝は寛永十九年（1642）八月に三代将軍・家光から従五位下・出羽守に任じられた為、この石灯籠を奉納したものと伝えられている。

※ 上長後村・下長後村

興国地誌によると、長後は安土桃山時代の天正十九年（1591）、上長後村と下長後村にわかれ、この頃に上長後村は幕府の直轄地に、下長後村は旗本・朝岡氏の知行地になったという。その後、寛永二年（1625）に上長後村が土屋氏の知行地となり、その状態が幕末まで継続したという。

1-3 セツ木神社（藤沢市高倉1128）

祭神 源義朝

創立 不詳

境内社 稻荷社（宇迦うか之かのみたまのおおかみ大神）

例祭日 10月3日

（ただし、現在は10月の第一土曜日を例祭日とし、「高倉たかくら囃子ばやし」が奉納されています）

社屋等の形式

1. 鳥居の形式 両部鳥居（木造） 本柱・袖柱とも土台建てに改修。

2. 社殿の形式 拝殿は神明造様式、棟は甲板・障泥板で押さえるが千木、堅魚木は無い。覆殿は入母屋造り。本殿は一間社流れ造りで両下がり屋根の幣殿で繋ぐ。(二棟一字)
3. 屋根・装飾 拝殿・覆殿は金属板平葺き、幣殿は金属板瓦棒葺き、本殿は柿葺き。

由緒

旧七ツ木村(明治元年に千束村と合併、高倉村となる。)の鎮守。安土桃山時代の文禄年間(1592~1596)に渋谷義重(渋谷庄司重国の子孫と伝わる)の厚い信仰があったことから、渋谷義重がこの社を創建したとの説がありますが、創立者・創立時期ともに定かではありません。

文政九年(1826)に社殿が再建され、大正十三年(1924)に氏子連により拝殿が改築されました。

「新編相模国風土記稿」によれば、この社は七ツ木村「鯖明神社」と記されていますが、明治元年(1868)に「七ツ木神社」と改称され、明治六年(1873)に高倉村村社となりました。覆殿の中に「奉献・井上傳蔵」名で「鯖明神社」と揮毫した扁額が保管されています。なお、現在の拝殿は昭和四年(1929)2月上棟となっています。

また、この社は境川、引地川、和泉川流域に点在する「サバ神社」(現存するサバ社は12社で、以前は14社あったという。サバの文字表示は鯖・左馬・佐波・佐婆など様々)の内の1社です。祭神・源義朝(源頼朝の父)の官職が「左馬頭」(左馬寮の長官)であったことからだといわれていますが、和泉川流域に点在するサバ神社3社については、なぜか摂津国(現:大阪府と兵庫県の一部)多田に住み、鎮守府将軍・左馬権頭を務めた多田源氏の祖、源満仲(多田満仲)が祭神として祀られています。

江戸時代頃から、この12社のサバ神社の内の7社に詣でると厄払い(特に、はやり病や疫病)のご利益があるとの信仰から「七サバ参り」という行事(12社のサバ神社の内、どの神社に参詣するかは決まっていなかったようです。)が大流行しました。

境内に点在する石碑石仏等

境内入り口階段下、階段上左側の小高い山間部には江戸期から明治期に至る様々な石造物が残されています。

- ・清瀧不動明王塔「文字」 鳥居脇階段下
- ・青面金剛庚申供養塔「六臂青面金剛像」寛延二年(1749)造立 鳥居脇階段下
- ・道祖神塔「文字」 鳥居脇階段下

・庚申供養塔「文字」 鳥居脇階段下

・養蚕関連祠

(石祠右側面に「持田製糸・持田初治郎」の刻銘があるそうですが、現在は風化等により判読不能になっています。)

・小御嶽石尊大権現・御岳山座皇大神・三笠山天皇ほか数基の山岳信仰の碑
階段上山間部(小御嶽石尊大権現は碑前面中央に「小御嶽石尊大権現」、その右側に「大天狗」左側に「小天狗」との刻みがあり、同様の碑が長後仙元塚にもありましたが、今は市民センターに移されています。)

備考

① 両部鳥居

両部鳥居の「両部」とは、真言密教の「金剛界」・「胎蔵界」の両部を意味し、仏教の影響が濃く残る、神仏混交の名残であり、四脚鳥居とも称します。かなり珍しい形式の鳥居ではありますが、境川を挟んだ横浜市泉区下飯田のサバ神社にもこの形式の鳥居があります。

② 左馬頭^{さま(ば)のかみ}

平安京内裏に置かれていた朝廷の馬寮(左馬寮・右馬寮)に属す官職で、左馬寮の長官。馬寮では、諸国の牧で育てられ朝廷に献上された馬の飼育、調教をした。馬寮の官人は武官として武具、帯剣が許されていたので武士の憧れの職であったという。

なお、源満仲の職歴は左馬権頭であったので厳密に言えば定員外の権(仮に置いた地位)頭であった。

③ 現存するサバ神社(12社)

神社名(神社庁登録名)	祭神	所在地	備考
①左馬社	源義朝	横浜市瀬谷区橋戸 3-20-1	
②左馬神社	源義朝	大和市上和田 1168	
③左馬神社	源義朝	大和市下和田 1110	
④飯田神社	源義朝	横浜市泉区上飯田 2517	
⑤佐姿神社(神田)	源満仲	横浜市泉区和泉町 4817	
⑥左馬神社(中之宮)	源満仲	横浜市泉区和泉町 3253	
⑦七ツ木神社	源義朝	藤沢市高倉 1182	
⑧鯖神社(下飯田)	源義朝	横浜市下飯田 1389	
⑨鯖神社(今田)	源義朝	藤沢市湘南台 7-201	

⑩鯖神社（鍋屋）	源満仲	横浜市泉区和泉町 705	
⑪左馬大明神	源義朝	藤沢市西俣野字御所ヶ谷 838	神社庁の登録なし
⑫佐波神社	源義朝	藤沢市石川 141	

※その他、サバ大明神として社はなく、石祠のみ残る二社が横浜市戸塚区東俣野にある事が判明している。

1-4 諏訪神社（藤沢市高倉 2 6 7 4）

祭神 たけみ なかたのみこと やさかとめのみこと
建御名方 命 ・ 八坂刀売 命

創立 寛永二年（1625）と伝わる。

境内社 天神社・稲荷社・八幡社

その他、境内には二十六夜信仰の講人の手による祠などがあります。

例祭日 9月27日（現在は9月の第四土曜日）

社屋等の形式

1. 鳥居の形式

明神鳥居（石造） 沓石の隅入り角の根巻石。亀腹付き

2. 社殿の形式

拝殿は神明造り 覆殿は両流れ造りで両下がり屋根の幣殿で繋ぐ。覆殿の中に御神輿を本殿として祀る。

3. 屋根・装飾

拝殿・覆殿は銅板平葺き 幣殿は瓦棒葺き 拝殿の棟は神明造りの甲板・
あ おりいた障泥板があり、甲板に「梶の木」の神紋が二つ並ぶ。千木・堅魚木は無い。

由緒

寛永二年（1625）の創始と伝えられていますが詳細は不明です。元文三年（1738）に小社殿が造営され、その後、文政年間（1818～1830）に社殿を造営し、七ツ木村・千束村（明治八年（1875）に両村合併して高倉村となる。）の鎮守となりました。寛政八年（1796）には梵鐘が鑄造されましたが、第二次世界大戦で供出させられ、昭和五十年（1975）に氏子等により新鑄されました。

古代における諏訪信仰は「龍蛇信仰」であり、諏訪大社の縁起絵巻では諏訪明神が姿を現すときは「巨大な蛇の姿態」となる。との様子が描かれています。鎌倉時代には北条氏と諏訪氏の強い結びつきから、承久の乱以降、諏訪氏が各地に所領を得、その地の氏神様として諏訪神社を次々に勧請、今では全国に約25,000社もあり、特に神奈川県は多く、藤沢市内だけでも5社あり、片瀬の諏訪

神社は諏訪大社からの分霊日本最古、と言われると共に諏訪大社本宮以外で上社・下社を持つ唯一の神社となっています。

この高倉諏訪神社の拝殿正面に掲げる「諏訪神社」の扁額は、地元上高倉出身で元警視総監・法務大臣を務められた秦野章氏の揮毫によるものです。

また、拝殿内には江戸時代末期、千束村（後、セツ木村と合併し、高倉村となる）で「^{せんせんどう}箭泉堂（^{せんせんどう}筭泉堂とも）」という筆学所を設け、周辺各村の子供たちに「読み・書き・算盤」に加え、絵画の指導もしていた師匠・矢沢保光（雅号：玉秀）が描き、文久三年（1863）にこの諏訪神社に奉納した役者絵5点が残されています。

備考

・建御名方（富）命

信濃国（長野県）一之宮・諏訪大社上社の祭神。大国主命の子。^{ことしろぬしのみこと}事代主命（恵比須様）とは兄弟。

「古事記」によれば、^{たけみかずちみこと}武御雷命（鹿島神宮の主祭神）が大国主命に「^{あしはらのなかつこく}葦原中国」（葦原国とは日本の意。また中国とは、^{たかまがはら}天上の^{あしはらのなかつこく}高天原と^{よみのこく}地下の^{あしはらのなかつこく}黄泉国との間にある国、地上の世界、すなわち葦原中国とは日本国の意。）国譲りを迫ると、大国主命は服従し国譲りを誓うが、武御名方命はこれを拒否し争う。結果、武御名方命は負け、足を折られたうえ、葦原中国から追放され諏訪へ逃亡、諏訪の地から出ないことを条件に許され、諏訪湖の水の神（龍神）として諏訪大社の祭神となりました。農耕の神、養蚕の神、狩猟・漁業の神でもあります。

一方、建御名方（富）命の妃神・^{やさかとめのみこと}八坂刀売命も諏訪大社下社および全国の諏訪社に祀られています。八坂刀売命は道の神・縁結びの神ですが、地方神話にのみ登場する神であり、記紀神話には登場しません。

藤沢市内の諏訪神社（6社）

名 称	祭 神	所 在 地	摘 要
片瀬 諏訪神社 (上社)	建御名方命	片瀬 2-19-26	神紋 四本梶 諏訪大社上社と同じ
片瀬 諏訪神社 (下社)	八坂刀売命	片瀬 2-21-16	神紋 五本梶 諏訪大社下社と同じ
辻堂 諏訪神社	建御名方命 八坂刀売命	辻堂元町 2-15-15	

大鋸 諏訪神社	建御名方命 配祀神・八坂刀売 命	大鋸 3-7-2	
石川 諏訪神社	建御名方命 八坂刀売命	石川 5-35-12	
高倉 諏訪神社	建御名方命	高倉 2674	

※祭神は神社庁登録簿に従いましたが、高倉諏訪神社の祭神だけは建御名方命一柱のみの登録になっていて八坂刀売命の登録はありませんでした。

・二十六夜講

二十六夜講は二十三夜講と同様に女人信仰の講ですが、二十三夜講に比べ非常に希少です。因みに、二十三夜講の本尊は「如意輪観音」（安産の神）であり、二十六夜講の本尊は「愛染明王」（恋愛成就）です。

・筆学所

実質的には「寺子屋」と同様に庶民の子供の教育の場。寺子屋は江戸時代、上方において手習いの師匠が寺院で町人の子弟などに「読み・書き・算盤」を教えていたもので、上方では寺子屋と称したが、江戸における町人らの子弟の学問施設は「筆学所」または「幼童筆学所」とよばれていた。しかし、江戸でも寺の住職が寺の施設を教育の場として使用する場合が多く、後には江戸でも寺の住職が寺院を教育の場として使う場合は「寺子屋」と称するようになった。

・矢沢保光

1590年から1600年頃まで千束村・七ツ木村は旗本・川井治郎兵衛久正の知行地でした。この川井氏宅の敷地の中に矢沢保光の「筆学所」がありました。矢沢保光は現在の町田市鶴川に生まれ、明治十四年（1881）に現在の湘南台で死去（享年51歳）しています。

筆学所師匠であり、絵画の師匠でもありました。この筆学所（箭泉堂または筭泉堂）には近隣の高倉や長後のほか深谷・吉岡（綾瀬市）・和泉・台村・柳明（泉区）・葛原・土棚（藤沢市）・福田・上和田・下和田（大和市）の住民が名を連ねていました。

2 長後地区の寺院

2-1 ^{りゅうぎょくさんせいこういんぜんねんじ}龍玉山西光院善然寺 (藤沢市下土棚 9 9 9)

宗派 浄土宗

本尊 阿弥陀如来

開山 西光上人（ただし、寺院創立から後、数度の火災により古文書、過去帳等が焼失しているため、これは寺伝によるものであり、文字として残されているものではありません。）

創立 不明

沿革

およそ 700 年前、下土棚村民の願いで西光上人が建立したと伝えられています。「新編相模国風土記稿」によれば、天保年間（1830 年～1843 年）の頃、善然寺境内には十三堂があったと記されています。またこの天保年間の一時期、善然寺は山号を「渋谷山」と変更していますがその後、現在の龍玉山に戻しています。

寺宝として本堂正面に「経机」があり、この経机には「龍と牡丹」の見事な彫刻が施されていて「嘉永元年（1848）」の年号と「鎌倉山之内、三橋幸助」の刻印があります。

また、本堂安置の「木造聖観音座像」は胎内に同じ小さな聖観音像を収め、通称「腹籠りの観音」（江戸時代彫像）といわれ、胸板を外すと胎内像を拝むことができます。この胎内像は「瀧見観音」といい、室町時代の作とされています。

墓域には藤沢市の指定史跡「^{ふでこつかぐん}筆子塚群」（五基）や江戸時代初期、下土棚の地頭であった竹尾氏の墓地（墓石十三基）のほか「インドシナ難民墓地」などがあります。

寺院参道の入り口左手には「南無阿弥陀仏」の石造・名号塔があり、この名号は大本山増上寺の大僧正・教典梅の筆によるものです。

法然上人六百五十回忌記念事業として、天保七年（1836）に建立された「山門」は昭和四十七年（1972）の大火災のほか過去に生じた数度の火災を免れ、茅葺を鉄板葺に直しただけのもので、建立時から残る善然寺唯一の建造物です。また、「龍玉山」の扁額は大本山・増上寺の冠誉大僧正の筆によるものだそうです。

その他、境内には万延元年（1861）造の馬頭観世音菩薩塔や嘉永七年（1854）造の二十三夜塔などがあり、寺院内には文化財彫刻として、本尊の「木造阿弥陀三尊立像」（最初の造立時期は不明だが、明和三年（1766）に補修されている。）、

「木造地蔵菩薩立像」（南北朝時代前半の造立）、「木造善導（浄土教高祖）・円光（法然上人）両大師像」などがあります。

備考

① 筆子塚（寺子屋師匠の墓）について

明治以前の教育の場は大きく分けて、武士の子供が学んだ「藩校」と庶民の子供たちが学んだ「寺子屋」に分かれていました。「藩校」は江戸時代に各藩がその藩の子弟を教育するために創った学びの場であり、儒学を中心に武芸などを教えていました。

一方、寺子屋は鎌倉時代ごろから始まり、庶民を中心に「読み」「書き」「算盤」（算術）「道德」などを、当時の知識人である寺の住職が主になり教えていました。しかし、寺子屋が庶民の子供たちの初等教育の場として広がったのは、江戸時代に入ってからです。寺子屋（筆学所を含む）に通う子供たちを「筆子」といい、師匠がなくなった後、その師匠を偲んで筆子等が建立した墓塔を「寺子塚」と言います。

藤沢市内には19ヶ所の寺子屋が、また、31基の筆子塚が確認されています。藤沢市内で一番古い筆子塚は、「永勝寺」（藤沢市本町4丁目）の僧・長円の筆子塚ですが、二番目に古いのが善然寺第二十八世「潤誉」の筆子塚で寛延四年（1751）造立のものです。

善然寺住職による寺子屋は5代続き、元治二年（1865）まで凡そ130年間続きました。

② 下土棚村地頭・竹尾氏および竹尾家累代の墓について

竹尾氏は旗本で、墓石の表示によれば、藤原姓を名乗っていたことが解ります。「姓氏家系大事典」（著者：歴史学者・太田亮）によれば、藤原姓・竹尾氏は三河国（愛知県）額田郡の豪族で同郡竹尾郷を本貫とし、舞木城（岡崎市在所）を居城としていたとあります。竹尾三郎右衛門某は徳川家康・秀忠に仕え、その子・元成の時「天正十九年（1590）」下土棚村の領主権（地頭職）を与えられたとあります。「元成は江戸城で亡くなり（享年37歳）ますが下土棚村に葬られ、以降竹尾家の子孫はこの地に葬る。」と記されています。

竹尾家の戒名を見ると「浄土真宗」であり、「浄土宗」（善然寺は浄土宗寺院）ではないので、善然寺が菩提寺ではないことが解ります。以前、竹尾家の墓地は石塔山と呼ばれていた、現在「富士見台小学校」の建つ場所にあったのですが、学校建設のため善然寺境内墓域に移転されました。なお、墓地を移転した際、刀

剣、手鏡、かんざし等が出土していて、善然寺に保管されているそうです。

江戸時代以前（天正十九年）から下土棚村の地頭であった竹尾家ですが、元禄十四年（1701）になると、下土棚村の一部（一部の場所は明らかではない）は上土棚村を知行していた旗本・遠山氏の所領となり、更にその約100年後の文化三年（1806）には竹尾氏は所領支配から退き、下土棚村は旗本・松平氏領と遠山氏領の二給支配となりました。

備考

- ・善導（613～681）享年69歳

中国唐代の僧。浄土教の大成者。彼は＜南無阿弥陀仏＞と口に出して唱える口称念仏（善導念仏という）を勧めると共に、「観無量寿経疏」^{かんむりょうじゆきやうしよ}ほかの著作を通し日本の法然や親鸞の浄土信仰に多大な影響を与え、日本では浄土宗の宗祖として知られている。

- ・円光（法然房源空上人）（1133～1212）享年80歳

1175年（承安5）日本の浄土宗を開宗、開祖となる。

- ・禅師

禅宗の高徳僧に贈る称号

- ・姓氏家系大事典

著者：歴史学者（法学博士）太田^{あきら}亮（1884～1956）享年71歳

2-2 長福山永明寺^{ちやうふくさんえいめいじ}（藤沢市長後416）

宗派 臨済宗（円覚寺派）

本尊 延命地藏菩薩

開山 清溪通徹（禅師）

創立 至徳二年（1385）（ただし、「藤沢わがまちのあゆみ」昭和58年藤沢市文書館発刊には、永和年間〔1375～1379〕創立とある。）

沿革

寺伝によれば、開山・清溪通徹禅師（1300生～1385歿）は相模国の人で、姓は三浦、号を天遊^{かんたん えうん}という。鎌倉寿福寺の寒潭慧雲のもとで出家し、京へ行き、更に中国元に渡り修禅、蔵主などを司り、元で約30年間を過ごしました。帰朝の際は乗っていた船が暴風雨に会い難破、無人島に漂着し、この島で37日間命を

つなぎ、ようやく漁師に助けられるという災難に見舞われています。

帰朝後、京都天龍寺第十一世、南禅寺（京都五山の一山）第三十六世として入住、室町幕府第三代将軍・足利義満や光厳法皇の帰依を受け、将軍義満からは紫衣を賜り、壮年には光厳法皇の修禅の師となりました。このことから永明寺は天皇家の紋章「菊家紋」の使用を許されました。

境内墓域には江戸幕府第二代将軍・徳川秀忠に仕え、諸国から納める金銀を奉行した朝岡家（藤原道兼流藤原氏）一族の墓があります。永明寺や長後天満宮のある下長後地区は天正十八年（1590）に旗本・朝岡泰勝の知行地となりました。当時天満宮や永明寺は荒廃していましたが朝岡泰勝は天満宮の再建に尽力します。寛永十九年（1642）には旗本・朝岡丑之助（朝岡泰勝の孫）の銘のある石灯籠一對（藤沢市指定文化財）が天満宮に造立奉納されています。朝岡氏はその後も天満宮神殿の造営、再建を行い天明七年（1787）には宮廟の再建と共に山王添え鎮座の「山王権現」（祭神：大山咋命）と伊勢山鎮座の「神明宮」（祭神：天照大神）を天満宮に合祀しました。

寛永七年（1630）永明寺は朝岡泰勝により再興されます。その後、天明年間（1781～1789）に火災に見舞われ、一山衰退しますが、享和年間（1801～1804）「長後誌史には享和三年（1803）とある」に甲州立野村（現：山梨県大月市梁川立野）圓通寺（臨済宗）前住職・龍峯が永明寺に転住すると、堂宇の衰退を嘆き修復に尽力、修復料の寄付などをして堂宇の修復が施行されました。永明寺保管の仏像「木造十王座像」の一体である「都市王」の上畳座裏に「甲州郡内立埜（野）村 圓通寺隠居 廣圓住山 龍峯 施主」との銘があります。

なお、朝岡氏一族はその後も世襲により明治維新に至るまで下長後を知行し続けました。

その他、永明寺境内には六地藏と共に、舟形の台座に乗った「岩舟地藏」（享保四年（1719）建立）があります。岩舟地藏は下野国（栃木県）岩船山高勝寺の本尊で、その岩舟地藏が関東の村々を練り歩きながら歌舞「岩船地藏念仏踊り」を行い、寄進を集めたが、当地にも村送りされて来たことがうかがわれます。

明治五年（1872）学制が制定され、明治六年には永明寺本堂を借り桃蹊学舎（長明学校「現：長後小学校の前身」）が誕生、授業が開始されました。

永明寺が保管する仏像類

- ① 木造地藏菩薩三尊座像（本尊）「中央に地藏菩薩像、脇侍として左に掌善童子・右に掌惡童子を配す。掌善童子は仏心を育てる・掌惡童子は煩惱を滅する」とされる。

- ② 木造聖観音菩薩立像 （百観音本尊） 製作 江戸期
 - ③ 木造百観音像（馬頭観音像一体を含む）
馬頭観音像を含め、百体の木造観音像がある。製作年、製作者が判明して
いるものとして、文化十二年亥年（1815） 作者は定山・悦山
 - ④ 木造十王坐像 文化十四年（1817）製作
 - ⑤ 木造開山坐像 室町後期～安土桃山期製作
- その他、江戸時代作の像三体、木造奪衣婆坐像・木造釈迦如来坐像・木造宝冠虚空菩薩像がある。

2-3 ^{てんとうさんとうしょうじ}点燈山東勝寺（藤沢市高倉258）

宗派 臨済宗（円覚寺派）

本尊 阿弥陀如来

開山 ^{しゅうゆう}秋雄 （中興）^{てんゆう}天遊和上

創立 1300年代（室町時代）

沿革

鎌倉幕府第14代執権（得宗）北条高時および北条一族が（北朝歴）正慶元年（1333）、新田義貞討幕軍に攻められ、鎌倉東勝寺で自決、滅亡したことを悼み、密かに高倉の地に建立されたと伝えられている。そのため山号を「再び燈を点じる」との意味合いから「点燈山」としたという。また、本堂屋根の大棟には寺紋として北条氏の家紋「三つ鱗」を配したと伝わります。

その後、乱世の時代が続き寺は寂れていましたが、江戸時代初期の慶長十四年（1609）、中興の祖・天遊和上により東勝寺は一新されました。

しかし、江戸時代後期に起きた大火災により、東勝寺の堂宇は貞享三年（1686）に鎌倉大工・渋沢七郎兵衛が建築した「山門」だけを残して全て焼失してしまいました。

そして、延享三年（1746）に再建されたのが旧本堂（流れ向拝付き入母屋造りの本殿で平成九年（1997）まで使用）でした。

その後も関東大震災や境川の氾濫などで被害を受け、幾度も修復されましたが雨漏りなど、老朽化が激しく、平成五年（1993）に再建が検討され、平成九年（1997）に本堂と客殿の新築および山門の修復が行なわれました。

藤沢市内の寺院で臨済宗の寺院は、この高倉の「東勝寺」と長後の「永明寺」の二寺だけだそうで、両寺の本堂は禅宗様の同じ造りだそうです。

本尊・阿弥陀如来は「阿弥陀三尊」形式で、中尊は「阿弥陀如来坐像」（像高 34.6 cm）・右脇侍は観音菩薩立像（46.7 cm）・左脇侍は勢至菩薩立像（46.8 cm）、寄木造り、玉眼入りで江戸時期の作です。

境内墓地には、七ツ木村・千束村の領主であった旗本・遠藤氏（知行地：200石）代々の墓（宝篋印塔一基を含む）があり、寺の北西辻には、地元民に「子育地蔵」として親しまれている「延享三年（1746）観音諸供養」と刻まれた地蔵尊が地蔵堂に安置されていて神山・岸田・小山・斉藤・塚越などの姓が刻まれています。

2-4 ^{むりょうざんせんりゅうじ}無量山泉龍寺（藤沢市長後 968）

宗派 浄土宗

本尊 阿弥陀如来

開山 心誉高吟

創立 不明 「天文十五年（1546）心誉高吟により現地に中興」（応永四年（1397）に板碑が建立されています。）

沿革

鎌倉時代初期、渋谷庄司重国（法名：長後坊）が念侍仏であった「薬師如来像」を鬼門守護として、祀るために建てた堂宇（薬師堂）が、渋谷氏の没落と共に風化等により破損して「薬師如来像」が野晒しになっていたのを心誉高吟が嘆き、付近に寺院（泉龍寺）を建立して、この薬師如来像を本尊「阿弥陀如来像」と共に秘仏として納めた。と伝えられています。

この薬師如来像は、奈良時代の名僧・行基が厄除け（諸病避け、中でも眼病避け）祈願仏として彫像したものと伝えられていたとのこと。以降この寺は「長後の薬師様」と称される古刹となりました。泉龍寺のある上長後村と言われたこの辺り一帯は、元大山道と滝山街道の交差する当時の長後の中心地であり、高札場の所在地でもありました。

明治十七年（1884）に、長後・福田・高倉・上和田・下和田、5ヵ村の戸長役場が泉龍寺境内に置かれ、また同年、羽根澤屋南隣にあった長明学校が、暴風雨により校舎が破壊されたため、泉龍寺に一時避難しています。またその後、明治二十五年（1892）にも長明学校が一年間泉龍寺に移転するなど、当時長後の中心地にあった泉龍寺は勢い盛んな寺院でしたが、明治三十三年（1900）11月1日本堂から出火する大火災が発生し、本尊の阿弥陀如来像ほか秘仏の薬師如来像も失ってしまいます。

その後しばらくの間、泉龍寺は無住職となっていました。昭和五年（1930）10月、本堂・庫裡が檀家衆の協力のもと、鉄筋コンクリート造りで再建されました。

しかし、昭和十七年（1942）、前年の昭和十六年に勃発した太平洋戦争の武器素材として双盤を供出したため、浄土宗の代表的な宗教行事「十夜法要」などは執り行うことができなくなっていました。

昭和二十三年（1948）4月18日、創建400年慶讃会が盛大に行われ、大本山増上寺ほっす法主大僧正・相尾あいおべんきょう弁篋台下の親教を仰ぎ、本尊阿弥陀如来像の開眼供養を行いました。翌昭和二十四年（1949）4月8日の「釈尊降誕花祭」には「張子の白象」を造り、これに花御堂を安置し、長後の街中を行進、子供たちに甘茶を振舞いました。以降数年にわたりこの花祭りは行なわれました。

なお、境内には、上長後村の講中の人々の手により造られた、明和四年（1767）の銘を持つ「六地藏」がひっそりと佇んでいます。

備考

・花祭り

正式には「かんぶつえ灌仏会」といい、4月8日のお釈迦様の誕生日を祝う宗教行事で、花で飾った小堂（花御堂）を造り、水盤に釈迦像を安置し、参詣者は小柄杓で甘茶（本来は5色の水）を釈迦像の頭上に注ぎ、また持ち帰り飲む。

・法主（ほっしゅ・ほっす）

一宗派の首長・法会の主催者

・台下（だいか）

貴人に対する敬称

・双盤（そうばん）

寺院で法会に用いる大型の鉦（仏具のドラ）

・十夜法要

浄土宗で旧暦10月6日から10月15日までの十昼夜間行う念仏法事

用語集

障泥板（あおりいた）・甲板（こういた）

神明造の社殿の大棟の両脇につけられる板。あるいは箱棟の側板を受ける厚板。

茅葺・柿（こけら）葺きなどの屋根の大棟の上端を覆う厚い板。

入母屋造り（いりもや）

屋根の基本形式の一つ。屋根の上方は切妻造り、下方は寄棟造りのように四方に屋根を付けた形式。

一間社（いっけんしゃ・いっけんやしろ）

神社本殿で、母屋正面の柱間がひとつのもの。

覆殿（おおいでん）

大事な建物を風雨から守るために外側から覆う建物。覆屋、覆堂、鞘堂ともいう。

大棟（おおむね）

屋根最上部の水平に設けた棟。

唐破風（からはふ）

中央部は弓型に立ち上がり、左右両端が反り返った曲線状の破風。破風とは屋根の切妻にある合掌型の装飾版およびそれに囲まれた三角形の場所。

亀腹（かめばら）

基礎回りや鳥居の根本に置く、補強のための饅頭型の土壇や石盤。

沓石（くついし）・沓巻（くつまき）

柱の下部に置いた石・柱の下部に付けた装飾金物。（根巻き）

向背（こうはい）

本堂や社殿の正面に張り出した参拝者の礼拝のための構造物。

柿板（こけらいた）・柿葺き（こけらぶき）

松、杉、榎（さわら）などの皮を剥いで、薄い板にしたものを使った屋根の下葺き材を柿板。その葺き方を柿葺きという。

散米棚（さんまいだな）

一間社・流れ造りの小祠。掛子造りともいう。

神明造り（しんめいづくり）

切妻造り・平入、円柱や鯉魚木を除き、ほぼ全てが平面的に加工され直線的な外観を持つ伊勢神宮系の造り。

千木（ちぎ）・鯉魚木（かつおぎ）

千木は屋根の棟に置く交差させた木。鯉魚木は神明造りの大棟に直角に並行して並べる木。

幣殿（へいでん）

参拝者が幣帛をささげる社殿。拝殿と本殿の間にある部屋。

幣帛（へいはく）

神に奉献（ほうけん）する物の総称。

担当：小宮正養